

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 1 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2021

課題番号：17K02731

研究課題名（和文）ナラティブに基づく言語研究の展開と医療分野への応用

研究課題名（英文）Application of Narrative Approach to the Medical Field

研究代表者

高永 茂（Takanaga, Shigeru）

広島大学・人間社会科学研究科（文）・教授

研究者番号：10216674

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：インタビュー調査等で得られたデータについて、ナラティブ分析とテキストマイニングの手法を用いて分析を行った。本研究においては4名の研究参加者（医師1名、歯科医師2名、薬剤師1名）から聞き取り調査を行った。地域医療の現状と問題点、医学教育への期待、医師・歯科医師・薬剤師のあり方に対する意見、現在抱えている悩みや葛藤、地域社会で生活するうえでの課題などが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究ではナラティブ・アプローチの手法を用いて調査・分析を行った。この手法を用いたことにより、アンケートのような大量の調査データを収集する方法と違い、地域で生活する医療者の「生」の声をすくい上げることができたと考える。また、現地に実際に赴いて調査を行ったことで、音声データだけでは得られない地理的、文化的な情報も併せて取得することができた。これらの情報は、収集した会話を解釈するときに変役に立った。

研究成果の概要（英文）：Data obtained from interviews and other surveys were analyzed using narrative analysis and text mining methods. In this study, four research collaborators (including, one doctor, two dentists, and one pharmacist) were interviewed. The data revealed the current situation and problems of community medicine, expectations of medical education, perceptions of the status of doctors, dentists, and pharmacists, current concerns and conflicts, and challenges of living in the local community.

研究分野：社会言語学

キーワード：医療コミュニケーション ナラティブ 地域医療 テキストマイニング

1. 研究開始当初の背景

(1) 本科研で用いるアプローチ方法 NBM (Narrative Based Medicine : 物語と対話に基づく医療) は患者を全人的にケアすることを目指す医療の方法論である。NBM は EBM (Evidence Based Medicine) のもつ過剰な科学性を補完する役割も持っている。現在医療コミュニケーションの分野で注目されている NBM は、医療面接等において医師が身につけるべきスキルとして言及されることが多い。(2) 厚生労働省の示す「地域医療構想策定ガイドライン」にはさまざまな施策が多岐にわたって記載されている。このガイドラインの p.33 に「医療従事者の確保・養成」という事項がある。ここに掲げられている目標を達成するためには、医療者(医師、歯科医師、薬剤師、看護職員等)が地域に定着することが必須の条件となる。医師の偏在が問題視されている社会においてこれはなかなか難しい課題であろう。医療者が地域に根を下ろすときにどのような葛藤があるのか、いかなる経過をたどるのかを知ることは重要なことである。また、急速に進む高齢化に対応するため「地域包括ケアシステム」も構想されている。これらの施策を実現させるためには地域社会に定着する医療者を養成する必要がある。

2. 研究の目的

本研究においては次の2つの目的を達成したいと考えた。(1) 言語学、文学、社会学などの理論と方法論を援用しながら、ナラティブ・アプローチとナラティブ分析の手法を洗練させる。【方法論、研究手法の改良】(2) ナラティブ・アプローチの手法を用いて、地域社会で活動する医療者にインタビューを行い、データを収集しナラティブ(経験の語り)を分析する。分析の目標は、地域医療を行う中でどのような変化や葛藤を経験したか、医療活動を行う際の心構えや工夫などを探索することである。本研究の成果を、医学教育に反映させる。さらに成果を公表して、「地域医療構想」等の施策を推進する一助となるよう努める。【地域医療の現状把握と問題の探索、研究成果の応用】

3. 研究の方法

本研究では3つの方法を用いた。(1) ナラティブ・アプローチ、(2) ナラティブ分析、(3) テキストマイニング。

4. 研究成果

インタビュー調査等で得られたデータについて、ナラティブ分析とテキストマイニングの手法を用いて分析を行った。その結果をまとめると、以下のようになる。本研究においては、4名の研究協力者(医師1名、歯科医師2名、薬剤師1名)から聞き取り調査を行った。研究協力者各人をA氏、B氏、C氏、D氏と呼ぶことにする。ナラティブ・アプローチの手法を用いて調査・分析を行ったことにより、アンケートのような大量の調査データを収集する方法と違い、地域で生活する医療者の「生」の声をすくい上げることができたと考える。また、実際に現地で調査を行なったことで、音声データだけでは得られない地理的、文化的な情報も併せて取得することができた。これらの情報は、収集した会話を解釈するときに変役に立った。

(1) A氏の結果

調査地の診療所では、「地域医療医・総合医養成プログラム」に参加して研修医を受け入れている。研修医を受け入れる側である(研究協力者の)医師の思いは、「なるべく早く地域医療に触れさせ、早くロールモデルに会わせ、彼らの思いを具現化してあげたい。いつでも何でも断らず診るといった地域医療マインドのようなものが全ての医者に必要なと思う」というものである。地域という環境の中で患者やロールモデルとなるような医療者と出会う機会をつくって、医学生や研修医に意識変革のきっかけを与えようとしていると見ることができるだろう。また調査地の特色として、医療福祉センターや教育行政の機関が同一施設内に隣接して設置されている点が挙げられる。この物理的な配置は、コミュニケーションの繋がりにも反映されている。実際に診療所の運営や医療活動を行うにあたって、行政からの協力が得られやすいようである。空間配置がコミュニケーションにとって重要な要素であることがわかる。また、学会などでもキャリ

アイコール専門医と考えられている傾向があって地域に行っているとキャリアが遅れるという発言も耳にすることがある、という語りがなされている。同様の指摘は、B氏のインタビューでも語られている。このような発言に対して、研究協力者の医師は、地域に一人で赴任している間は例えば内科専門医としては空白期間かもしれないけれども、自分が全ての責任を背負いながらその医療をやっているわけで自己達成感は強くなるし自己効力感も上がり自信もつく、と語っている。

(2) B 氏の結果

地域医療の問題のひとつとして、専門医の資格に関わるキャリアアップのことが語られる。地域医療に携わるとキャリアアップが期待しづらく、若い医師が地域医療を敬遠するという問題を提起している。こうした語り＝言説から、キャリアアップと「医師であること」を強く関連づけることで、地域医療を二項対立のもとに置いてしまっている一面も垣間見られる。高齢者の多い地域社会と、人口に比して医者が少ない地域社会・地域医療に問題意識を持っていることがわかる。B氏の語りからその現状を変えようとする意志も感じられる。またB氏の場合、全体と自分という構図・認識のもとで語りが進行する。すなわち、地域社会や歯科のような「全体」を意識しながら自分の置かれた状況を捉えている。自分には何が求められているのか、自分が次に選択すべき道はどの方向なのかといった葛藤は誰でもどこでも起こりうるものだろうが、地域医療に携わる医師には特に強く見られるのかもしれない。

(3) C 氏の結果

地域医療の現状について考える語り手の姿＝日常がインタビュー全体から見て取れる。地域包括ケアシステムの運用、若手医師の参加・定住、患者と患者家族への対応、医師としての在り方など、多くの葛藤を抱えていることが窺える。地域医療（歯科）が抱える問題に対処する際、ポイントとなるのは歯科医師会とケアマネジャーであると認識されている。歯科医師会は制度や教育といった点において重要な役割を果たし、ケアマネジャーは地域包括ケアシステム（多職種連携）での役割が重要視されているのだと考えられる。若い歯科医師の都会志向が地域医療の抱える問題点のひとつであると認識していることがわかる。C氏は、地域医療の基本には、患者だけでなくその家族と話をする／聞くことが重要であると認識している。地域医療にとって訪問診療が必要であるとの認識を持っていることもわかる。

(4) D 氏の結果

地域社会で生活するうえでの重要な課題・判断基準は、子どもの教育環境と親の労働環境だと推測される。同時にそれは、語り手＝移住者＝親が実感した環境の変化・差異でもあるだろう。こうした課題・判断基準をどれだけ解決・充足するかによって、「地域社会」に関する語り（肯定的／否定的評価）が変わると考えられる。新たな地域での生活（移住）で感じる困難や困惑は、環境（子どもの教育環境・親の労働環境）の変化・差異に関するものが多い。同時にそれは、「今は」慣れた／受容したということを含意しうる。地域社会での生活を語る際、外から来た人間というカテゴリーや視点が存在することが示されている。また、子どもが外に出る／外から帰ることについての語りから、地域社会にとって「外」は、問題（たとえば過疎化）を生み出すと同時に問題解決（たとえば活性化）をもたらす「別の世界」なのだと考えられる。地域医療に関しては大きく2つの語りが見られる。ひとつは地域包括ケアシステムといった制度に関する語りである。地域包括ケアシステムでは、「医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される」（厚生労働省 HP）と謳われているが、D氏の語りにおいては医師と看護というキーワードがこのシステムと結びつけられる。ここには地域包括ケアシステム＝地域医療という認識が見てとれる。医師や看護が語られることで「介護・予防・生活支援」という他の観点が後景化する可能性もある。もうひとつは、個人や病院に関する語りである。地域医療には核となる個人や病院の存在が必須であると考えられているようである。同時にそれは、個人間や病院間での“熱量”に差のあることを示すものでもあるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計14件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 蓮沼直子、高永茂、服部稔、菊地由花、飯田淳子、木尾哲朗	4. 巻 第13巻第1号
2. 論文標題 危機の時代におけるコミュニケーション教育の取り組み - 何が変化しどこへ向かうのか -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本ヘルスコミュニケーション学会誌	6. 最初と最後の頁 5-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木内貴弘、奥原剛、上野治香、岡田宏子、石川ひろの、高永茂、中山健夫、高山智子、河村洋子、加藤美生	4. 巻 第11巻1号
2. 論文標題 総説 ヘルスコミュニケーション学の研究方法論の探究 - これからの10年に向けて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本ヘルスコミュニケーション学会雑誌	6. 最初と最後の頁 2-6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石川ひろの、高永茂、川島理恵、野呂幾久子、藤森麻衣子	4. 巻 第11巻1号
2. 論文標題 総説 医療における対人コミュニケーション研究のアプローチ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本ヘルスコミュニケーション学会雑誌	6. 最初と最後の頁 13-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 脇忠幸、高永茂、谷口直隆	4. 巻 20
2. 論文標題 「資源」としての地域の可能性 コミュニケーションと地域社会の相互作用	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 福山大学人間文化学部紀要	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹盛浩二、脇忠幸	4. 巻 6
2. 論文標題 「総合的な学習の時間」で求められる言語能力 大学生の言語能力の実態から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大学教育論叢	6. 最初と最後の頁 35-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田口則宏, 馬場麻人, 美島健二, 山本仁	4. 巻 34 (3)
2. 論文標題 歯科医学教育者のためのワークショップ (富士研) これまでとこれから	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本歯科医学教育学会雑誌	6. 最初と最後の頁 82-86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 脇忠幸	4. 巻 19
2. 論文標題 文部科学省・文化庁報告書における「コミュニケーション(能力)」観についての覚え書き	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 福山大学人間文化学部紀要	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Nagatani, Y., Imafuku, R., Takemoto, T., Waki, T., Obayashi, T. and Ogawa, T.	4. 巻 17
2. 論文標題 Multidimensional and context-dependent nature of professionalism in dental hygiene: A qualitative study in Japan.	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 BMC Medical Education	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1186/s12909-017-1107-9	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 脇忠幸	4. 巻 18
2. 論文標題 「コミュニケーション能力」言説の内実とその背景 新聞読者投稿欄をデータとして	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 福山大学人間文化学部紀要	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田口則宏 (ほか5名)	4. 巻 9
2. 論文標題 地域歯科医療教育に求められるもの プロフェッショナリズムとの関連を見据えて	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本総合歯科学会雑誌	6. 最初と最後の頁 11-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田口則宏	4. 巻 33
2. 論文標題 歯学教育専門家	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本歯科医学教育学会雑誌	6. 最初と最後の頁 63-64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田口則宏	4. 巻 33
2. 論文標題 第7回歯科医学教育者のためのワークショップ運営記	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本歯科医学教育学会雑誌	6. 最初と最後の頁 53-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高永茂	4. 巻 1
2. 論文標題 関連性理論	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 基礎理論と臨床をつなぐ歯科医療コミュニケーションガイドの開発	6. 最初と最後の頁 23-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計17件（うち招待講演 7件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 田口則宏、長島正、河野文昭、一戸達也、新田浩、大澤銀子、秋葉奈美、岩下洋一郎
2. 発表標題 歯科医師臨床研修制度における臨床能力評価法の現状調査
3. 学会等名 第40回日本歯科医学教育学会学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鎌田ユミ子、吉田礼子、松本祐子、作田哲也、大戸敬之、岩下洋一郎、田口則宏
2. 発表標題 COVID-19パンデミックの歯科医師臨床研修への影響 ~令和2年度鹿児島大学病院研修歯科医へのアンケート調査より~
3. 学会等名 令和3年度南九州歯学会学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 脇忠幸
2. 発表標題 Web面接において大学生に求められる「能力」と現代社会
3. 学会等名 第24回日本コミュニケーション学会中国四国支部年次大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田口則宏
2. 発表標題 補綴歯科専門医におけるプロフェッショナリズム その基本姿勢
3. 学会等名 第128回日本補綴歯科学会学術大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田口則宏
2. 発表標題 診療参加型臨床実習後客観的臨床能力試験 鹿児島大学トライアル 実践例
3. 学会等名 第38回日本歯科医学教育学会学術大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大戸敬之、岩下洋一朗、松本祐子、作田哲也、吉田礼子、田口則宏
2. 発表標題 授業科目「プロフェッショナリズム」が歯学生のプロフェッショナリズム醸成に与える影響
3. 学会等名 第38回日本歯科医学教育学会学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松本祐子、吉田礼子、大戸敬之、岩下洋一朗、作田哲也、田口則宏
2. 発表標題 歯学部教員を辞職した女性歯科医師のその後のキャリア選択 何を重視して決断したか
3. 学会等名 第38回日本歯科医学教育学会学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 長谷由紀子、脇忠幸、梶谷佳世、今福輪太郎
2. 発表標題 質的研究をはじめよう！ 研究計画を体験してみる
3. 学会等名 第73回医学教育セミナーとワークショップ
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 畠中大吾、七熊翔、山本惇一、浅田道雄、大戸敬之、作田哲也、松本祐子、岩下洋一朗、吉田礼子、田口則宏
2. 発表標題 研修歯科医が抱く総合歯科のイメージ
3. 学会等名 第12回日本総合歯科学会学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 脇忠幸
2. 発表標題 新聞報道における「地域医療」の談話分析
3. 学会等名 第22回日本コミュニケーション学会中国四国支部大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 脇忠幸、谷口直隆、高永茂
2. 発表標題 物語の「資源」としての地域 テキストマイニングによる「地域医療」言説分析
3. 学会等名 第22回日本コミュニケーション学会中国四国支部大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田口則宏
2. 発表標題 歯科医師臨床研修制度について
3. 学会等名 第23回中国四国地区歯科医師臨床研修指導歯科医講習会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高永茂
2. 発表標題 コミュニケーション研究・教育と「地域」
3. 学会等名 第21回日本コミュニケーション学会中国四国支部大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 脇忠幸
2. 発表標題 コミュニケーション・地域格差・オリエンタリズム
3. 学会等名 第21回日本コミュニケーション学会中国四国支部大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田口則宏
2. 発表標題 離島における歯科医療
3. 学会等名 第194回鹿児島大学国際島嶼教育研究センター研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田口則宏
2. 発表標題 新たな時代を見据えた歯学教育のデザイン
3. 学会等名 第3回鹿児島国際歯学シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 田口則宏、和田尚久、白井肇、二宮一智、村田雅史
2. 発表標題 総合歯科医と専門歯科医
3. 学会等名 第10回日本総合歯科学会学術大会（招待講演）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	田口 則宏 (Taguchi Norihiro) (30325196)	鹿児島大学・医歯学域歯学系・教授 (17701)	
研究分担者	吉田 登志子 (Yoshida Toshiko) (10304320)	岡山大学・医歯薬学総合研究科・助教 (15301)	
研究分担者	脇 忠幸 (Waki Tadayuki) (50709805)	福山大学・人間文化学部・准教授 (35409)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------